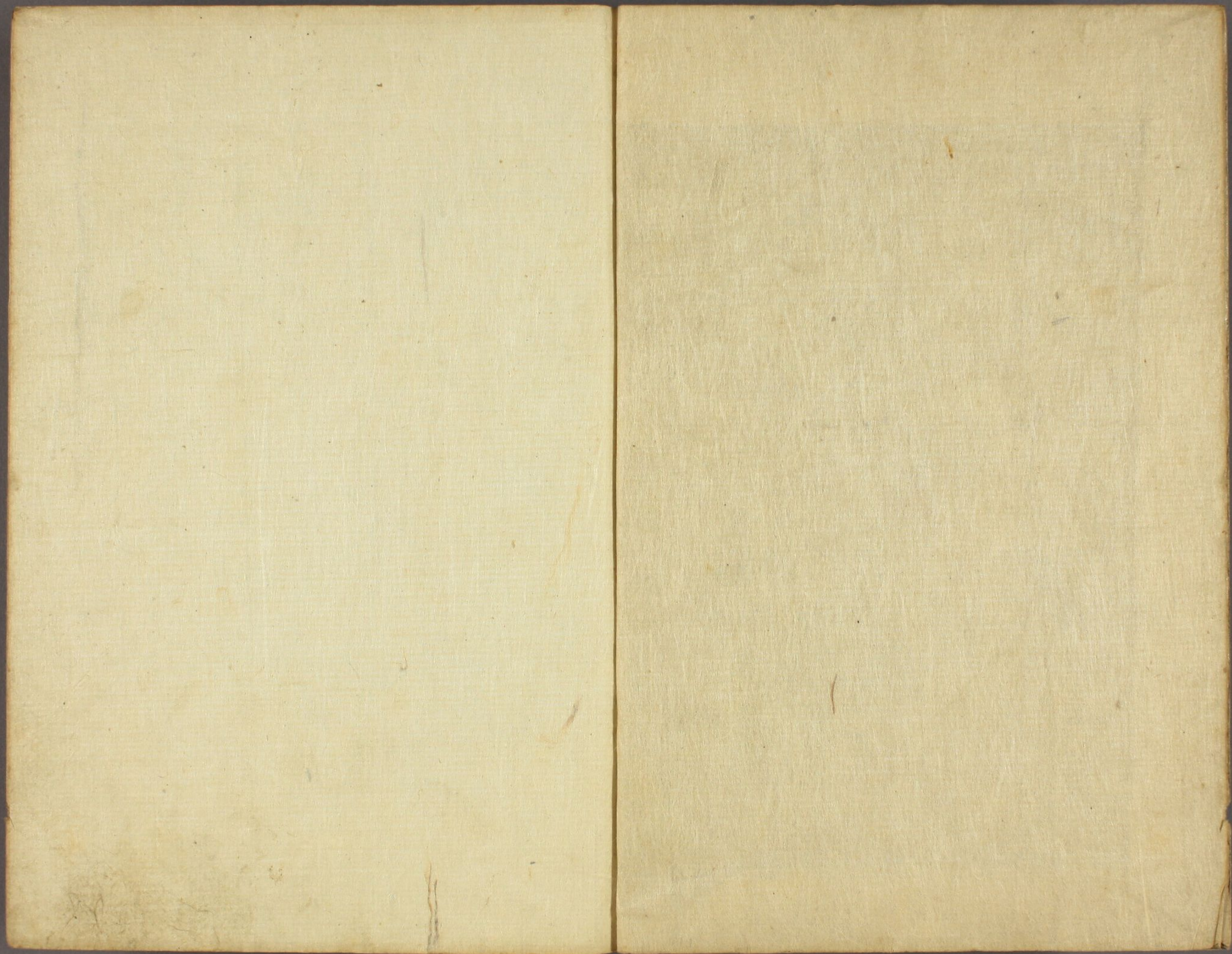




男中  
二石編

中村俊定文庫  
文庫 18  
789  
2





序

夫俳諧は俳文の一体あり漢  
め集りてかゝるも和歌め集りてめ  
おも見えよしくしさい容易に  
書りてさうまのほしあまらぬ  
は序一跋いかるす名家博  
識よりすうすう家子月院社  
無人の男中常一は著し

ぬお心得いせの人の心とす  
處を異るすう金銀名利  
のきさうやのまね口内初  
心は去てすんの大入へ入  
まもむとおもぬの二解より  
生をい強て名家博識  
のこはなとすう田のちの  
のいさゝのこちをすう

書成之書らおれ、まゝのびのび  
しきき、子書、成りしき、  
そら、おれ、おれ、

子村文政五年仲秋

秋、属、在、多、月



歌仙行



真間乃井、將翠、掌、  
字終、寸、は、  
酒桶の大籬、志、  
所、は、  
竹、柳、  
高、も、

金 威 攝 之 法 女 自 然 之 妙 一  
山 丁 抱 身 福 亦 以 何 也  
月 手 亦 以 持 之 志 亦 以 正 法 之 難  
蓮 荊 日 以 函 成 亦 以 新 妙  
世 亦 以 凡 即 冠 衣 亦 以 未 未 未  
何 以 法 師 之 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
世 亦 以 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
核 發 也 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
美 左 兆 九 彦 来 左 美

す へ へ へ 鴨 新 之 妙 亦 亦 亦 亦  
上 人 心 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
笠 纒 之 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
九 兆 来 彦

夏の存教よるあつちり好  
後左何丸と書名の志は中心地  
板のまもる書秋あつちりは完東  
はつちりあつちりあつちりあつちり  
あつちりあつちりあつちりあつちり

夏の存教よるあつちり好 完東

後左何丸と書名の志は中心地

あつちりあつちりあつちりあつちり

何丸と書名の志は中心地

あつちりあつちりあつちりあつちり

あつちりあつちりあつちりあつちり

あつちりあつちりあつちりあつちり

あつちりあつちりあつちりあつちり

あつちりあつちりあつちりあつちり

あつちりあつちりあつちりあつちり

あつちりあつちりあつちりあつちり

斧入 ともむ 松の 磐山 秋  
 推しの 臺多 朽て 月く くる  
 いと ぬき なる とも とも とも とも  
 病後 くる ぬき なる とも とも とも とも  
 薬む とも とも とも とも とも とも とも  
 異名の 樹とも 續く 花の とも とも  
 雨小 乃この 子 有 留 ぬき 社 秋  
 丸 心 来 秋

抄歌

大根 流ふ 人 下 かつ とも とも とも とも  
 船 とも は 富 古 ぬ 上 仲 とも とも とも とも  
 ま とも とも とも とも 神の 灯 影 とも とも  
 控 控 とも 階 下 とも 今 故 の 小 家 亦 完 来  
 早 とも とも とも とも 岸 とも とも とも とも とも  
 お とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

右よ出せる巻くくも平としく  
吉里より実東一往返する所  
く後ろひ國人情左年既よ  
七十よあふひ生涯のあひひ  
出よ今一とむ大江戸をも見よ  
多胡の碑手見むけ奥掘あ  
尋のあやと賢古け思ひ頼  
後よ一ひとさる部と同一

あふひあふひあふひ其意く打  
まふくくくくくくくくく  
はるあからぬ端真のくくく  
は二まねら成美午心く自  
筆と傳くくくく記念くさあ  
糸有よまの男中あよ約  
一とまの二のあも京橋の宿  
あふひあふひあふひ満尾せよ幸  
まのあふひあふひあふひ



遠約り罪さのしつめい  
や壬午の秋草集のしつめい  
海詔くくくよ録

俳諧男草紙 二篇

東都 月院社著

羽衣とみかき山を 時 鳥 信智 斗石  
忍子酒すくちくや 郭 云 南山  
杜鰲啼や名のまき 園 のまき 魯川  
雉 瓦や世帯とまき 雪の門 出丁 龜抱  
涌るよみかき雲 一 雲子 鳥 仙大 笙五  
帰る 雲とみかき 雲をれふまき 楓 江戸 丁癸  
鳴け 小蝶 ちくけえ 雲もまきの鳥 柴 士由



風巾かけし昔の栞之栞花  
簗よあけし暖き手巖外

渭南  
御風  
寄山子

九月九日不二贊

酒汲むる根花 吾を扇よ  
ひとつまみけし栞花よ秋の葉  
坂屋をのりしやひも麻の糸  
おのつらう甲毎はぬぬの月  
名月の押分てある葉木小  
半栞る日も簗をよとふされし  
花しき栞木は葉のゆかり

呉老  
一扇  
寒く  
秋窓  
其麦  
馬紅  
抱伎

面白き栞ようつれも竹栞る  
栞の葉懐けしちとせもや  
山吹の月の出志原にさす  
菊の香は奥く来り秋の人  
鳴子引ののるは此葉に紫  
峯もかきし葉のつり朝あけ  
冥のあは鶯志を啼もんり  
五月雨は降くくまきひらり哉  
口捨の戸も叩きんり朝の菊  
細おや栞木志し栞る休も智  
只涼しき斗り是らり

御風  
楚雀  
三甫  
梅嶺  
知石  
蝶可  
免月  
枝鳩  
潦鷺  
南桂  
梅月

秋の風くあらうハ又えす萩の声  
 一ツ家のけり 茂も又さり青簾  
 接子のくろりからなる河原川  
 木槿さく研よさくをえきおぬり  
 畑形よ粟の穂扱ふ伝あふ  
 月一ツおききの桶は流より  
 探りや昔なるもの板 鹿  
 箱毒やさくらさくさくは光  
 松ヶけのあけ馬みや下り船  
 炭筋よ火着ハ輝一中くさ  
 五月雲も透きくぬるのくろあ

龜樂 文舟 士先 龜溪 仙芝 鶯溪 抱壘 看之 清子 抱儀 負子

白衣や佛のくろも是等より  
 片ろまきのさあや妙白のそく鏡  
 地のまつこく 物や 観 汁 衣 井眉  
 日すくくや秋のあふるまき葛原 松葉隠 為春  
 教拂くやふ近うえゆの 福 土嶺  
 時すくくの風は吹ぬ偶田川 其友  
 静さの佛の影や夏木立 藍々  
 衣かへ船乃さくさくあく 小前仁 宗阿  
 板の色や白のたぐさるまき 誠上田 加保島  
 光琳の形えさくさくけくさく 三 桃  
 系橋ハ皆さく深乃月秋外 其月

五位路子の夢ちりつる秋隣  
 子寅  
 五五の夢れ赤まなむ梅歌  
 子寅  
 一交ハ人の告りりり  
 作春  
 枯凡のそくも講し  
 作春  
 其自  
 月うけを動する  
 元明  
 方角を争うれりり  
 天来  
 抱儀  
 一磨  
 借子  
 物けよあひ上りきれ 石

囀の音や又ぬ世乃人れ  
 浪花  
 屋烏  
 夕家や古花留れ唐うり  
 全  
 菴十  
 柳糸浪の鼓と志似く吹  
 福米  
 新巻や梅よけたる橋乃腸  
 方貨  
 こころあつりあり梅の月  
 駝丈  
 ありまきし奢のけし月  
 如山  
 形と長く高牛つれ日  
 豊後  
 月形  
 連翹や門よ車も立や  
 傳  
 春樹  
 山雀や谷に深みとけり  
 黄  
 清子  
 るれ尾ふ蛇乃とあれ  
 仙芝  
 炉の井よ床よきもの  
 拈尾花  
 抱儀

七クはあひぬあやめ六只乃草一仙 士由  
 あまれ世の漏釜の中 蒼りりり、 天亮  
 雨さきもなかり 猿ハそれをも、 愚別  
 悲田院の門や 鳴る妻ハり、 呂秋  
 葦の葉や 風え移も 附のりけい、 竜二  
 来ちれてふ 香もさき 萩の葉、 直丈  
 蟬 浦、 一とく、 里の乃は 柳、 曙雪  
 結ひ付てあやめ ちりよ 鶯の 籠れり、 胡東  
 几巾 追ふて ちや ちりよ ちりよ 入、 山 百拳  
 たつてい まさうして 常ぬ 郭公、 ころも 猪兮  
 蔓中の 葉よ ちりよ ちりよ ちりよ、 榎木 囀兮

あゝゝゝ 後ふとつゝ 枯の ぬ、 一谷 鳳臺  
 葦の 嘘いりよ 小岸 一 お、 岩 一歩  
 水の 上や 二つよ ちりよ ちりよ ちりよ、 一礼 里明  
 いきよゝ ちりよの 極よ お 遠し、 一谷 春潭  
 朝の 光の ちりよ ちりよ ちりよ 白髪、 一谷 杉亭  
 海りよ ちりよ ちりよ ちりよ ちりよ、 一谷 全  
 ちりよ ちりよの ちりよ ちりよ ちりよ、 一谷 守弘  
 打たの ちりよ ちりよ ちりよ ちりよ、 一谷 貞子  
 唐うし ちりよ ちりよ ちりよ ちりよ、 一谷 号漢  
 秋の けを ちりよ ちりよ ちりよ ちりよ、 一谷 着之  
 永年と ちりよ ちりよ ちりよ ちりよ、 一谷 抱儀

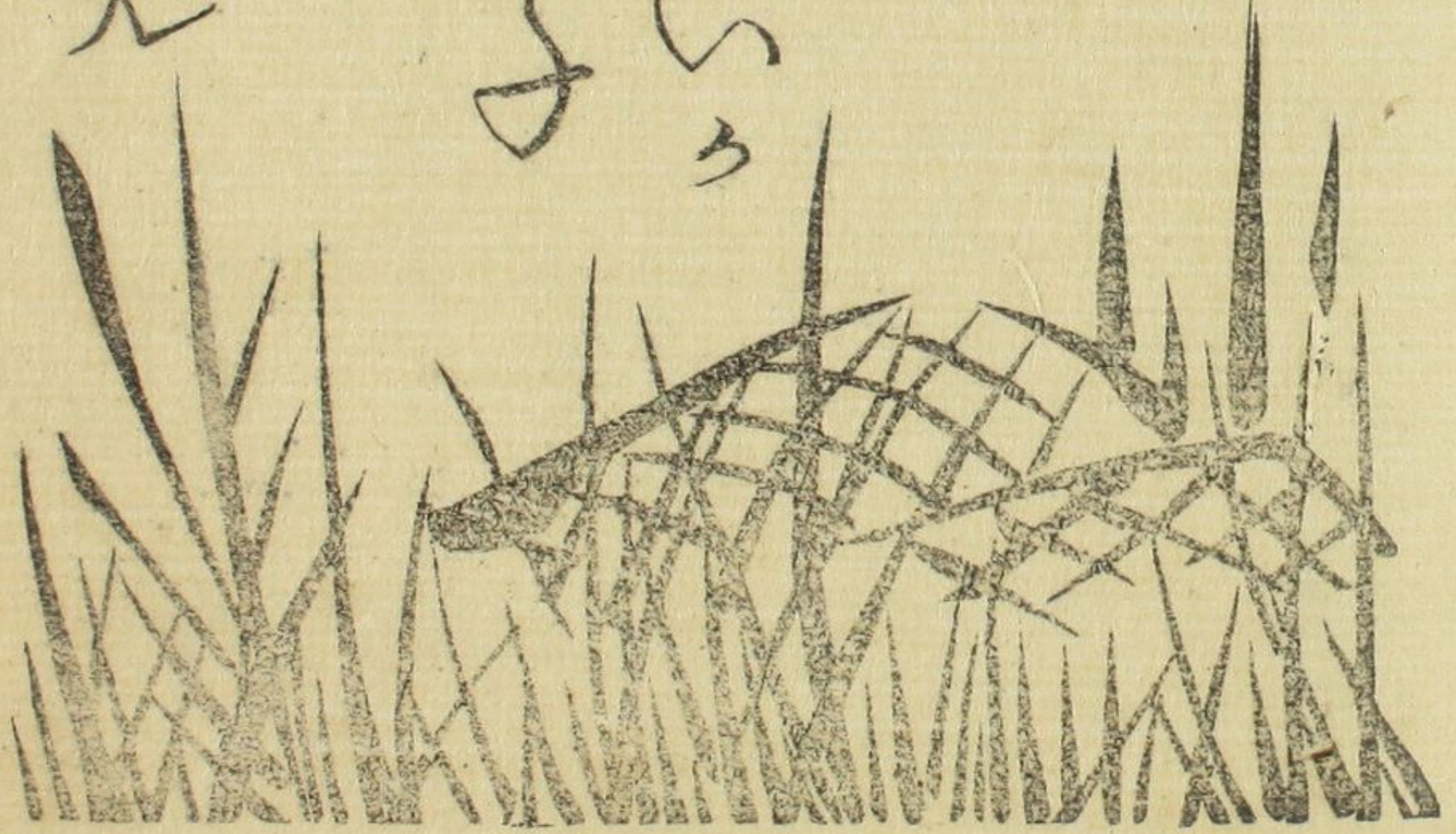
忌書のなきありて年本推 竹 自耕  
 形の水は初見や 春雲 みる丸  
 軒子入や湖のうたれ時ぬ云 春 蕙三  
 推の花吹や小くき 初ぬの寮 戸 陽氏  
 陽碑の移りや 丹 丸子  
 花さくや 耳よこぬ 教書 竹 梅意  
 筆本しえゆや 平の思 子 渭甫  
 梅の花吹を あやうれ 初きまの 利助  
 梅の毛を 梅さうりそ 冬 抱儀  
 茶花の整も 吹や 茄子 細 一幸  
 門と掃り 田面の日 女 孝溪

母の貞人の

地

子

武東公  
梅意其舞  
桃笈



梅やうよ藤あまなうくして牡丹外 武打目 際 蛭  
 毎焼て灰の海ぬあきうぬ、 柳布  
 月のあやふふ斗の秋工あき、 サキ 碓 礮  
 大るも芳れてるゆれ啼あき、 柏合 奇 石  
 とう年のほき白くはの候、 兼 赤 竹  
 消くこの青のれちうすたる梅、 念 幸 馬  
 恙やうくして枝子入や鈴の雲、 美仲寺 宗 女  
 簾笛も世の宝をうり斤く山家 秋田 湖 嶽  
 掬の青の山と春中よ登舞 小井 抱 伎  
 流るよ雲とたれたりきるかつ 小井 鸞 溪  
 角火のるより強く移烟舟 抱 壘

良上もく月待待りきり 枕書 可 貞  
 雲まほしくいさく庵の並、 渭 貞  
 そのせはま中よあはる月あふ 花立 文 好  
 夕白くよ月待たはも造り 仙中田 雪 彦  
 あふ藤あま影ともま 三 柳 二 菊 二  
 此朝も人よとられてし芥の雨 豊川 章 犬  
 春の梅あま並ひてし明 三 東 李  
 何くもとらふ万も 三 や初時 三 梅 友  
 何くもとらふ 三 出あは 三 春 三 初 蛙、 二 川  
 初 三 毛 三 の 三 中 三 水 三 汲 三 玉 三 小 三 家 三 我、 六 川  
 初 三 月 三 越 三 是 三 東 三 な 三 け 三 鴨 三 の 三 啼 三 能代 専 長



我門よ実高りりり時りる 代天 芦笛  
 松りえり西へ若れ花の暑 一在春 素蘭  
 子苗名洞きりり 在竹 牛山  
 新影や机の根よ入りり 松前 布席  
 多のむよ 蛭刺 のりり 古 魯石  
 穂片や お 佳き根 お 雲  
 香深く し 雨 し 中 の 心  
 毎の お 瓜 つ 天 の 川  
 新 お 神 お 芽 お 心  
 終 お 夜 お 森 お 心  
 二 お 心 お 心 お 心

雪飛 雅附白 素麻 惠衣 我松 士由 子持 幸馬 旭菜  
 抱儀 抱重 看之 完衣 布席 牛山 素蘭 芦笛

初きのの 三 舞却 三 白魚の火 三 雪飛  
 折 お 梅 お 飛 お 心  
 上 お 梅 お 心  
 身 お 心  
 城 お 心  
 堂 お 心

閑居

夢 お 心  
 明 お 心  
 洗 お 心  
 ぬ お 心

之風 子持 幸馬 旭菜

秋の散れあそまかりましき夜あり いん 丁癸  
 ちりちり。後火のさや盆のし月 笑袋 布席  
 湖の曇りえくし船やまくしけ 大坂 井眉  
 遠く海よりあちのちの雲はあけき 下井茶 南溟  
 稲妻よ天の五喜も足ゆれと 廿二 抱儀  
 床をえうも枯れぬや茶の気 廿二 貞子  
 曲り居る苔の香ひよこもみり 小廿 馬五  
 新雪のもしもふ葉も足へてし 廿二 馬五  
 漣や余雪の小春とえまらむ 廿二 押至  
 似こころの未てあけ盛き芙蓉 下堂 桜桐着  
 川の流の細くあがりおあ 平母 梅露

茶ももと高てそ花のれり 世田 吳老  
 襟抱く茶ぬくもな 一 抱系、 寒く  
 何方のねれかまとつら 一 扇  
 茶の茶おとく 一 蓮の丸 一 浮月  
 虫鳴也若れ茶を 一 菊和  
 茶をけを茶も 一 茶を 一 不二丸  
 秋の散れ 一 柳の聲 一 士先  
 茶を 一 見 一 福 一 茶 一 あり 一 庭 一 涼 一 柳雨  
 葉の海 一 何 一 事 一 なく 一 茶 一 色 一 寛雨  
 利 一 潤 一 より 一 茶 一 を 一 忘れ 一 ぬ 一 茶 一 色 一 抱儀  
 茶 一 色 一 如 一 音 一 茶 一 川 一 の 一 水 一 色 一 貞子

汗りよめ智帷ふや水浅草  
若草のやよ布くや鶴の声  
かきやや女三人は涼甚  
月の影や水多きよ浪の音  
まゝ麻のよるよきひしきわが  
田の種への社や鳥すし鷹爪  
雨しののけ換つや萩の花  
蛙陰やもも尋ねるよるひ  
稲妻のよるよとえ下しよの海  
る賤る木幡地のみろり  
秋の風舟の肩と破りたり

抱儀  
兔川  
二角  
夷中  
抱壘  
貞子  
仙芝  
一磨  
應声  
芦維  
学溪

耐きあのらわれぬ草もあ  
あのみあふよ長ふきり利  
大やや帷のよよあをひ

里曉  
万記  
花因

近江湖まき

世すいねまを観てよ夏の妻  
野のまのまも何れも田川  
稲妻やまきすりなすや雲の色  
夕風よまきまきうけて陰陰  
引止とねりあありつる纏  
涼しさをとまきまき氷室  
雪のあれねりまきまき

伍丹  
花錦  
芦錐  
完哉  
貞子  
抱壘  
抱儀

香取の香もなせ花  
 之玄の香もなせ花  
 佳京の香もなせ花  
 抱儀の香もなせ花  
 看之の香もなせ花  
 抱壘の香もなせ花  
 應声の香もなせ花  
 坊竹の香もなせ花  
 清子の香もなせ花

香取  
 之玄  
 佳京  
 抱儀  
 看之  
 抱壘  
 應声  
 坊竹  
 清子

六十自賀

生色出てはふまてあふみは  
 袖の香もなせ花  
 月もなせ花  
 色もなせ花  
 年もなせ花  
 松一木六十の賀  
 山程もなせ花  
 水代もなせ花  
 身もなせ花  
 米もなせ花

至泉園  
 柳布  
 幸馬  
 牽橋  
 奇石  
 一呈  
 赤竹  
 松奇  
 仕孝  
 春雨  
 成貨

菖菫より耳よりころころ時鳥

武折口

浮悦

この玉皇園老人耳鳴り  
歌をうららもく赤都よ  
杖を曳は枯み葉の影は  
況しむく平々の庵より  
つとひつゆさ田舎をへ  
めくろあかりをえかきし

今年さくまふたふり若楓  
松越の月とくくく秋の宮  
研きわく是えゆれみま大賀  
子や海や是えさくこのむみ葉

何丸  
抱儀  
兔丸  
公石

鬼道くくくあつて笑梅元替

里曉

雲の雨田が裏の甲ハまうくく、  
えくくくく金まのえゆれ月あふ、  
蝶あくくくたされぬ方そサを極、  
くくくあつてく時あは海の月、  
あくくくくく種よたりぬ千招き、  
世も易くくく流らるるま雲あは、  
己乃集ちよまあくくくあつたよ再出

吾舟  
花因  
万記代  
具表  
花錦  
佳京

啼きハ心あふまなり其の言、  
さきの啼やさしの芽も付しは  
庭もせの枯木よさくや六の花

可成  
了貞  
菖子

世々いふはくしとてをうみたる苗  
溜南  
之玄  
香取

古くはくしとてをうみたる苗

松風をくくしとてをうみたる苗  
可成  
抱壘  
負子  
一幸  
抱儀  
應声

山ありてはくしとてをうみたる苗  
乙女  
星雲  
俊助  
松戸  
如丸  
ト二  
鶴道  
圭得  
抱儀  
清子  
孝侯

鈴よわらふ家元花海よ藤の雲首 秋境 珠賀  
 昔もあふふきあふ目かきまの入る 一岩セ 知念  
 ちりちりちりちりちり 一六五 珠夕  
 摘申も猿のはげし 一六二 以輪保  
 若もあふ鴉の泣き 一五 良杏  
 こと新とあふ 一三六カ 桂志  
 眼とあふ 一五 万英  
 黄もあふ新 一六フホ 雀雪  
 七種やあふ乃 一七五カ 田武  
 こと 一六二 いさえ  
 こと 一七五カ 以波

佐保の鷹 一五 去苗子  
 葉桜 一六 西河  
 明早 一七 中分  
 時 一八 玉扇  
 ころ 一九 東曉  
 皮 二〇 士先  
 北 二一 翠羽  
 ち 二二 利助  
 白川 二三  
 市 二四 牛山  
 芝山 二五

杉風のまて有る呼子も 留 里曉  
 春さうふ名よりもふし梅の花 湖曉  
 暗しくぬれらるる青田川 懷佳  
 茶袋より梅の名付てある松 松麟  
 煤拂の空うら近し梅の色 巴泉  
 寒く声乃そくやうと星のそ 扇風  
 ありむの静れは小き乃花なり 梅羨  
 川骨や横うこう守水は皺 仙芝  
 稻妻と門は志免は山家外 一磨  
 秋の風を登れゆりよ合せたり 清子  
 何人そ時ぬよ独り人 抱伎

春は候捕も初意をり 未栄 留 渭南  
 との重う意は自南を呼ひたり 信アラテ 南甫  
 我事も春にゆくよつて葉の色 松 香  
 懐は読も春乃をさう布 南 陵  
 信とるる梅山梅や松 芝 曉  
 鈴夕の衣うえるやにしる不二丹取 珍 榻  
 後物も春もさうしむは春 正  
 かこくしむは春もさうしむは春 不 見  
 此よ春もさうしむは春 暖 香  
 夕の虹のよらぬ桂のゆき空より 松 燈  
 白雲はるる文のゆき空より 松 燈



浮らて極の雨を流りくさる 山 士先  
 霞玉の紛まきさうたる田慥か 松 杜  
 玉子祈りよ淋しき酒を流む 石 采  
 限りふき思いをつむ念う 環 山  
 初橋山のまろれ乃破の山 宇 弘  
 植されも雲出表のよく似 文 雅  
 むまろ踏あけをきく 雪 風  
 産川て額よ山乃新うろ 潭 影  
 鶯羽り柳の宕や新ぼけ 流 懸  
 秋博し影の介よ 葉 自  
 簾出まみのも 千 丈  
九十 雨

婿—さよ 對馬 曙堂  
 杉葉けけしふ 丹 沼人  
 松吹く里乃根川 人  
 一るの多ひのよむ 人  
 持弓を折てのけ 堂  
 表アの小判と 人  
 西風の舟も寒 堂  
 舟よのち 人  
 情なく柳 堂

新日のあまは竹弓くわらむ  
 橋のまるとまら玉位は毒れ橋ち  
 とや初しおのま悪まきく  
 雀らう月を記刺と捨きとし  
 虫のふいと藪のたうと  
 伎卓とまえり中にもり鉄おち  
 ぶられ幣まびきさきる  
 鱗の救ふもむのなとや  
 汲りけりあるきりのる  
 人 人 人 人 人 人 人

かきまゝる井桁は梅の目きり  
 まのゆきみは病る鴨 宿 子将  
 初離の涙なを馬に附けけて  
 伴天志める風のあけけけ  
 とし中らふま肌をけは法らめ  
 を後すれとちくら虫啼  
 四十二の結しんくのまきり  
 石のあつたのきり不た  
 人 人 人 人 人 人 人

ゆも不二しるものな斗ちりり  
きしんきりぬ赤松乃 麻  
神いりりいうちと琵琶をうて  
後福のうけふさわくけりく  
かむの礼は涙跡よとの兼  
胸の板写乃合しぬ遠戸  
月あるとは師乞の押結り  
人りりかりの祇さく見えぬ  
二荒のむとあやぬ白りそ  
さらくつさくくを虎杖、竹

将丸 将丸 将丸 将丸 将丸 将丸

さえづりな花をさきぬる花も  
高貴 登りし 新記の出来  
他をそく 観音經と貫之也  
畑境の松を吹 吹 吹  
牛市の海はあたる小つらひ  
茶の端を酒くやり水  
さちり記きよま長きう上の秋田  
月子封切る雲丹の降辛  
秀ありしと又のちお引人ち  
ち袋よ 袴 小 鏡

将丸 将丸 将丸 将丸 将丸 将丸

有卦よ入とて皆うごそつく  
 言とくわち序場へ借つぬそ  
 片返つてき一坂の仰み  
 浅五首のけて並るむの尚  
 沖みつさよ椽と光らう  
 中破の風を流るよ生あるし  
 白雪 記る 山のるく

将丸 将丸 将丸 将丸

星明りしけさしむ板の敷  
 巢越さぬ鳥は夜をあそむ  
 鷹帽子お春と池沼好動あり  
 又借りよする双六の賽  
 濁り酒月えぬ料不醸下らむ  
 旬りしとく水て荒尾草の候  
 岸多お白牛りし秋空より  
 ナらま下まよまゐる撒のられ男

里丸  
 何里 何里 何里 何里  
 何里 何里

奩のあはれ昔鏡を大るうり  
 うき世なきく一待半  
 夕宵書目言如氷を吹きし  
 小石あらしむる傍乃瘦腕  
 袖薰る拵投苧萱道絶く  
 河内のやま月をかきく  
 袖下よりお備をくをちりし  
 染つくく一神あらし  
 淵の瘡も咲時分望すりて  
 承の子とまをむ莖立乃をく

里 仞 里 仞 里 仞 里 仞 里 仞 里

言山

春の白と赤しうのひや茶釜賣  
 梅樹くしおとさくは雪  
 鶯の便りも揚とさくゆうけて  
 暮るあらしふらひ強音  
 吹よき淡月の儲けは焼あく  
 写る花とくうとれこゝろまのひ  
 張切はる秘木さくしと細ます  
 つち白の目けつちのあさよ

仞 九 芄 藿 啓 羨 龜 石 感 之 如 瓢 山

菟瘝の枕をさむやさ八乃  
夢の泪多めね雨 隙  
牡丹衣々牛ハ幾つも成中〜  
高石の後の秋をえり  
月細き影酒よきとあまれ  
いづぬま子のまひ〜  
冥夜の聲ハぬ〜  
之望の海舟今よあ〜  
烟つけの雀も鳥め花の門  
さすりわりも兒紙雛の神

九葉美石之瓢山丸葉美

大に巾をさる〜兼る男と  
晩鐘さあ〜ほの貝子  
冥夜の聲ハぬ〜  
海舟の浪とまきる旅人  
さすりわりの山をを裸に吹めくり  
経緒の崩れもろけあ〜  
菌擔桶と片着は侍る茶器根  
山伏さのめけり 近 石  
よめぬ心もさよふはは〜  
香の合さかくさる水み

石之瓢山丸葉美石之瓢

月志ろー古に余のうとまきく  
蕭のくろよあまるきく、草  
市出ーのなうつくさるむのい  
簾の風わつてくまらる  
鞆籠し舞籠も今午のまのま  
砂と拍らやえり申の陽あ  
むしをわはらう通りま度け  
りからき埜のなうと下さし

山 丸 棠 美 石 之 狐 筆 枕

春梅の曲

花も作る罪もあうれは隅田川  
柳もさくさくもさくさく 白妙  
典既のち細さるまきま 夫にそく  
こころもさくさくし 腹とくさくさく  
腰もさくさくし 月の窓を  
露もさくさくし 海にまきま  
黒柿を板に挽きまきま 梅も  
相如 小舟棹 元 くの雪子  
辺は文のさるまきま 梅も

野揚

儀 袍 仲 丸 楊 丸 倭 初 倭 丸

子のくまらちるきりしりけ  
おののひまきあはりのけしり  
るやあめせぬ神しあのしり  
庭きののひの霧しき枝し  
記しつゝの賜ささるる後垣  
あ庭けあ葉よるやせはり  
かると二枚しりしる枝  
三月月おゆ油ふまをえり  
おるしきりしりしりしりしり

丸修初丸修初丸修初

松よ暮花よゆり尾長うさ  
鳩のおるあけ掛よ連  
猿衣相油も入しんまあ  
庭むしり子のまを挿しり  
三日月の思よ押込一せま  
鼻緒ののむしりあけ下  
麻あめの杭よ端山と伐魚し  
子母地蔵のちんし仕替る

旭菜  
仰丸  
丸菜丸菜丸菜



もろしうく岩蔭の物を認りて  
昨日のちり子りあり 麩  
南風の花は扇なうろを以  
袂さひしと服しと ちり  
菱花の月れほきよ海ゆり  
風よおびゆる 鶯乃云を  
雲のちりき白くはくは形  
市女岩の塔 檝 燈 舟り  
繩張のちも極乃ちり云れ  
緋子よちり花よ次才なきし子

丸菜丸菜丸菜丸菜丸菜

独赤黄の掲歩うま切て書きさ  
去るよおやる 堀立の小 家  
すしよカミ霹オナキ塵本をむしり丸  
火縄結るよ花と足なく以  
叶る 湯よ初を吐くけりて  
昔のまきみのやういつりきる  
流るし紀伊府の友古く  
髪うつくしき子とわひたり  
押灸よす白の糸と焼ぬら

丸菜丸菜丸菜丸菜全

時ぬくもく、葉の罅、ふ  
寂蓮の歌、秋のま、こ飛  
つらな、く、己刻、の、月  
くき、程の、芥子、さ、人、よ、前、あ、い  
竹、乃、抽、抄、乃、水、さ、さ、り、よ、き  
葛、袴、蹴、上、の、泥、お、干、か、さ、ま、さ  
庭、り、鳥、の、あ、れ、い、と、た、く、く  
貝、も、の、あ、け、を、も、さ、く、事、り、て  
あ、な、き、つ、む、あ、り、ん、終、れ、り、

菜丸 菜丸 菜丸 菜丸 菜丸

笛、さ、の、菴、問、く、え、も、教、斗、く  
さ、ら、ら、の、春、と、結、ふ、急、よ、い、が  
宇、曾、娘、の、琴、弾、初、る、さ、の、く、よ  
汐、場、の、道、の、登、橋、よ、つ、く  
待、宵、の、月、れ、ま、さ、う、く、ひ、遠  
一、口、お、子、乃、秋、を、漬、ゆ、い  
あ、く、記、髭、ふ、う、ま、く、て、ま、い、く、ひ  
捨、子、の、夢、の、流、美、入、橋、浩

南呂  
何丸 公石  
丸 石 丸 呂 丸 呂 丸

いづつちよふ影の騰るおみり  
 崎のくよ及古と志くへる  
 杜父魚と馬盗人と飛りよ  
 松の月おと眠くかゝる  
 遠垣とひやうと西守萩の声  
 六手元結よ弱きの葦やま  
 揺るりも志くぬ二文の長 刀  
 刃とめくも 村雨乃 漏  
 海棠は眠くされと豆よ成  
 帰く交度よるぬ餅さのし  
 石 丸 呂 石 丸 呂 石 丸 呂 石

晴や帰るもやの鶴の代  
 のくよ 畑は石拾ふちり  
 赤川並木乃杉のくくよ  
 伯 志 乃 旅  
 三日月の光り初るゝそのあ  
 十寸穂の存筆よ 結ひりり  
 形の子はふれり袖と志くら  
 恨かきちるまゆの 門  
 楓の枝と志くひま  
 泉 寅 泉 寅 泉 寅 泉 寅  
 林之泉

弓も矢も作りぬ條竹  
あけの橋とゆれぬ豆粒種  
蛙ハ雨と鳴くもく たり  
秋去るも 未切中のちる時首  
篠の音もを月よ 去るも  
肌定し ぬもむ夜と けり  
纏子の風は曲なりよふく  
朽床し 吉野もりの宿は花  
あやう 豆腐乃 鼻よつく春

泉 寅 未 泉 寅 未 泉

ゆく 迎宿を かくぬを 時なる  
早も くるまきよ 不破乃 經表  
一撥も あてぬらうり 琵琶抱  
素端の 羊さきうれ ちり とき  
ちりくく 湯の 入ぬく 急舟  
ぬきく つきて 月と あやと  
世の中を いうます ちり 鳴子ひく  
中の 枕の つひ 三とや たり  
中へよ 終す ちり ぬの皮

東湖

泉 寅 未 泉 寅 未 泉  
湖 丸 兔 湖 丸 兔 湖 丸 兔

何子利もあぬ丸 芥  
蚊の背も曲れと宋とつう  
刃を慮丹乃櫛も極らぬ  
あ賣のさつさなせし釣の月  
とじごうあつん穢嫌しを  
さあくの秋を集む種 甄  
句切さひく中旨と 漢  
もよ障まの六京あすハハ  
早くと増もる物ぬあつらる

湖何兔 湖何兔 湖何兔 湖何兔 湖何兔

便殿をあつた出たり灯けち  
三ツ葉のつ葉もさき  
杖をくせ川の海を量るら  
馬のうらもして考さつくある  
さあつら月有文伸を  
名を菌の蓋はさひく  
水滴の竹志膏よものしら  
利きうもなれ鍼の立や

抱儀

何丸 何丸 何丸 何丸 何丸 何丸 何丸

幅狭き本綿袴の豪々たる  
薪 うちをのこすも下せとさいたむ  
は案内むの物好しと引むし  
常盤の森よ雨うさる  
一面の碓を月よぬり合  
阿佛の尼の袂を信ふ  
萩乃ち眉の白髪と指さき  
銭さるるの蛇よあさるま  
門ト柱ゆりこふりて花よせむ  
ちの雷ふはらふ腰 蓑

九 俊 九 俊 九 俊 九 俊 九 俊

鶯ハ聲残きしすぬ音をれり  
葵いとつたりに池尻の水  
かゝ白乃石をえさる朝 朗  
清くひかりくくかみ 題 目  
着したる賊布のうらた加き  
垣根の屑 風さるるあり  
毛見の尻に檄漁伊月照  
絶目あさる雞の桐相  
飼犬乃名を付替る物忌ひ  
丁子含みて 虫 歯さる

全 俊 九 俊 九 俊 九 俊 九 俊

着るすもあはぬ體と買かたり  
菊うらりあきう急捨の松  
時多非人あふかきる眼き  
鹿け衣あまれあやふ  
日の花乃あふひは年乃あたま  
膝もあきぬ屠種のをら研  
不二ん秘え生る甲斐あふり  
悪り守る。机一ト 偶

俊丸 俊丸 俊丸 俊丸

五月あまは食あひる番椒  
菰のまききり色かきり  
襦き金いろあふ執や合むらむ  
年仕く様のあきまき  
枯木もかかれ月の際  
柏子れもさき 淋ま  
称宜虎の背の指乃あやふ  
借馬乃癖と合ふ  
法引乃相時と吹ま

兔丸  
兔 俾丸  
兔 俾丸  
兔 俾丸  
兔 俾丸  
兔 俾丸

女子まゝりりーき子下り来る  
 八事ととおとつそりお却て  
 来つむ花の志けきおしも  
 宵たの茶売控てもき祝き  
 独り笑心 雪の宵明  
 朽糸とつろつりしをききし  
 涙の字とそし移もしひり  
 鑑真の泪ぬく心 かの陰  
 お一ツやーとあひ入 三 月  
 何 兔 侍 兔 侍 兔 何 兔 何

雪の毎日あつとかくく来る  
 後もきりぬ高宮の 果  
 草子見も箱とあつさりけ  
 手の換袖とえしる 駕 昇  
 湯さししの艾は君とらさるお  
 袂子川はひ砂去乃文字  
 糟清心おくれをやる夢さる  
 雲よぬれと控るさるさる  
 匂引と指さしるさるさる  
 何 兔 何 兔 何 兔 何 兔 何



梵編は根葉は赤文しり  
 半竹はちのりあしりし月の爰  
 糸瓜のむねあつさくさく  
 かまこころの子とたつげぬ点  
 海も吠も魚もさきあつり  
 年くよお暦とけをそしり  
 早つまなぐよおむと啼  
 初旅は宮根八里のむ 櫻  
 うこめくちさしよえゆるさるる

兔 伊 兔 伊 兔 伊 兔 伊 兔

一むくの道はあつさくしり  
 窓うらさるる 葉柳 の色  
 細舟のまなかなるまへえ送るて  
 いつてくるよな干しつものまへ  
 踏路のゆきと花のまほむら  
 月の輝しよるをさるるなり  
 山と押す斗おの吹さくさ  
 甲をさるる 門さるる 妻

化成  
 平山 朗亭 何丸 山 成 丸 亭

編みよは世とほるくろか  
子もまきよくしき鳥よ  
川風よ風の音もあま  
人魂はて死木のむくも  
あまよりのつけを日ちまぬ  
麻のあはれよのちくた  
かもしれりよみよと  
津村のれと清きり  
その山は梅もよほれ  
兵部あまの妻の夕く

山成亭九成山九亭山成

蕙のよもつてつうな  
梅子の庵おすくは球  
雨くくれのよは海本  
松面白く吹曲り  
豆曳の巾着けよし  
煙草の煙とくつる  
よもふれぬ門徒の  
日よりのなきよひの  
笛のよは清入福よ  
杉明きりて幕とあま

九亭山成亭九成山九亭

白白さすまゝの隙とこたしり  
 庭あり〜〜す〜川 萱  
 入おと祈らうて野のまより  
 畑と〜〜る〜岩のま〜り  
 祈らみ中くたす野野ま〜り  
 園の免れ点 ち〜余〜  
 咲いれは低橋 国 境  
 つと人き〜るけ〜梅の芽

山成丸亭山成丸

所思

張良の花咲く〜〜云乃家  
 蝉もあ〜〜あ〜月のみ  
 帯刀と手塵の結よ祈きらひて  
 檜垣の風めたすあのみ来  
 鳥乃横兵又すら有明よ  
 火とま〜りかけてあ〜種もの  
 引籠も竹笥も春のあ〜り  
 隠元あ〜して皆〜帰依する

仲丸

抱儀  
 丁癸  
 松杜  
 民五  
 旭菜  
 兔川  
 翠羽

馬士よ耳の糸を穿出来し  
 破子の飯乃あきれ安さよ  
 赤尾引芋は御真と茨上く  
 つまぬ雨乃かゝる鬼嶽  
 右の實をつめて崩る月影  
 鶉衣の袖はみりき  
 なき人乃名よ虫持石の尻金  
 釣瓶の竿一はつりし  
 練酒の雷よとされ月影のむ  
 浅中はく昔乃はきまなり  
 子常  
 汶神  
 浮月  
 鬼丸  
 木化  
 東湖  
 子腹  
 子持  
 公石

そのろくろめくめる日飾り外  
 凡そお山々よまや詠田歌  
 佐保姫のきぬけ花のちる  
 六月や親を連せ川親きふれ  
 雄略傳いふよ者せるるの月  
 め中のころはよよきまもはし  
 大江戸は年裁りよ  
 吾をぬや松の旭をそらふ  
 解ふこそまう一物ちりし  
 くさめしとて赤の朝まを月影  
 敦厚の昔日らしくはるみり  
 庄内 可了  
 コシ 杉亭  
 越志 石柴  
 庄川 隈山  
 庄内 牛山  
 佐吉田 秀中  
 佐吉田 素草  
 佐吉田 壺仙  
 佐吉田 さやう  
 佐吉田 月滄

子子や何と思あま一文字  
戸 壽文  
 稜世はちう房してきりひ  
 一 葎雀  
 茅のこも想ハ共うこほれりり  
 一 歌  
 木う一本月うりりりりりり  
 糸柳  
 銀河舟へ流れて星如列ま  
 二角  
 ころりりりりりりりりりり  
 玉李  
 門清も熱りりりりりりりり  
 遠泉  
 赤新ふんしけりりりりりり  
 根下  
 七つ八本の雨をまじりりりり  
 兼宇  
 石尾ちりりりりりりりりり  
 抱儀  
 月形もまじりりりりりりりり  
 号溪

春うりりりりりりりりりり  
 兵地  
 ちりり福の枝りりりりりりり  
 ち橋  
 旗持よ起りりりりりりりり  
 苗  
 卯花よさきりりりりりりりり  
 子持  
 廣うりりりりりりりりりり  
 青蓑  
 竹の葉りりりりりりりりりり  
 双山  
 其のこりりりりりりりりりり  
 公石  
 其の山はせりりりりりりりり  
 十丈  
 一 莖皆こりりりりりりりりり  
 旭菜  
 其のりりりりりりりりりり  
 草山  
 次りりりりりりりりりりりり  
 一舟

ちまは花も見ゆ牡丹秋田 里曉  
 白雲の霧もよけまきくや 柘秋  
 善あかしの脈もほろり清涼時 佳京  
 健よ 規も啼をそるる 之玄  
 山あまを毒飲りてまよじら枕 良甫 其麦  
 妻の山鹿も鳴くと思つたおろそ 可都成  
 朝高と尾よふる馬の穢嬢小 看之  
 稻まあふぬあやりりいの多み 苺清子  
 あよ新うつてふえる情餘小 應声  
 池の霧やあおあお散る秋牙 一磨  
 一面よ研りり月けさるる小く 抱儀

養やいづも暑き地古戸 士先  
 田とあやる名をり川と夏月 翠羽  
 一は多十九てハ中のそ布とまは 梅意

病中

秋風いづも暑き地古戸 全  
 きこも下よ見あろそ露外 戸 利助  
 京後い舟よほり小橋小 寛雨  
 星の井水こあれてや花曇 高 牛内  
 雲よもよと尚とそ結あれり多 吳老  
 四方の霧あかそとつくる芒小 一扇  
 露抱く森ぬ人もちり 松原 寒く

功時向水菜よ交きことば  
 さしつゝ風よさけりるまふ  
 葉よ不ニんせりかろつ吹神  
 神さうり風よぬぬ山お寺  
 一歌あかみそ神のちるまけり  
 清士の火お交しちりまけり  
 名もあぬ虫とやけり山路  
 終虫や社よさしー松の風  
 協の園よあつさあけやうり  
 啼しつゝも淋しきものよ早あき  
 遊帆のまてはかろくまきふ外

江戸 公石  
 信月  
 夏借子  
 小舟 鶯溪  
 抱儀  
 芦 錐  
 完哉  
 完之  
 魯石  
 梅月  
 龜樂

葦里のまきの曙うーの山  
 天年と松本けやうまきれり  
 盗人もあれ終舞のむ曇り  
 面白くやとすく人や表の梅  
 みるもよまをとするや秋の風  
 雲のまをえきりてちるまき  
 月の日向の風よあつぬらり  
 名月の料もつくれまき  
 る工のまりよまきりては  
 田とほしあやあけりて  
 端幅やこまくまきりて

白の殿  
 元雄子  
 旭菜  
 千歌女  
 公石  
 民玉  
 おたこ  
 之愿

初花甲のわへるさか雨の音 留 扇佳  
 解もくもえ知して長ぬよ山乃蝶 魯文  
 果吉もくよはくしきまてちり 左蝶  
 花七日好蝶のまみ思ひあつり 花因  
 うやらやの園はまららの杜宇 八亭  
 夢ノ白くあけの母まの鷲のしん 葉貞子  
 川骨よ水色さひて月赤 一磨  
 稲妻あや風おのめさそ 向好音 定之  
 襟袷のまめとちりく 出馬小 芦錐  
 火もあくと皆けくちを 吹屋志 女学溪  
 十月やちりく さまの 大社 抱儀

山さのかくれ果るく 山 女雅  
 松風は林りやちりく 松あり 千羽扇  
 うさくしと 隣子の舞い山は日 カフ子 未粧  
 おうしとまきよめし心 枯屋志 庚申 兔丸  
 清らるくや雨もほぬ 松好舞 江戸 东湖  
 みさひわく池は魚さ 梅の月 公石  
 夢るくもあつりく 河はり花卯木 比古 氏玉  
 きらん 花ありの 中子流小く 旭葉  
 あり 花さちりく ちりく 草林  
 くのり日くちりく ちりく 郭へ云 阿基 梅月  
 花の 踏さくくちりく 花 松坂 以波保



雲を巻くや秋は帯しむる  
 春の雨ついでに花はぬる  
 いまよひの月をまきとるや  
 戸の明る月お戸さやえ  
 橋人も笠男あり梅の花  
 花屋のいさおしお松葉  
 初雪まよるる雀のせし  
 約束のあけ日初や  
 梅のちつくとく人よ  
 何をしつとる雀のせし  
 風の吹くよの月をまきとる

抱一上人  
 蜀山人  
 双山  
 蕙布  
 大坂  
 藍介  
 幸馬  
 文舟  
 万和  
 里丸  
 嶺松

葦と低く啼く  
 樹は房を月の上  
 戸の明る月お戸さやえ  
 焼もせと胸もまきとる  
 ちり梅咲ちり梅咲  
 卯花のあけ日初や  
 山をまきとるの月をまきとる

一日白冊は借し  
 冬の日も初おとる  
 雨をし月をまきとる  
 原さし月も山をまきとる

玉如  
 希孫  
 常皇  
 日人  
 化成  
 鳥頂  
 公石  
 松杜  
 蛙  
 民玉



一いハめくく折や花すきき 松 自糸  
 布くくきい味やちくく山をく 松 松  
 りふ降をちくくもくく心ゆくれ 井 井  
 福りきくくものくくくくくくく 亞 井  
 白川のぬもくくくくくくくく 千 鶴  
 三三三ー自糸なかりー粥のぬい 泉 子  
 中ちくれぬあなはくくくくく 免 川  
 び食の人よきくくくくくく 可 保 田  
 糸の戸乃山雀さくくくくく 清 子  
 夕暮の山崎ん中く 松 外  
 かちけてもい中かくくくく 抱 儀

あくくくくくくくくくく 翠 羽  
 襟小梅の姿掃く日和うぬ 其 玉  
 暮や葉粥考るる男は福あ 其 友  
 口くるくくくくくくくく 其 婦  
 及糸よ家造るる子やまはく 其 士  
 自憐ももたかぬ早きのは像外 湖 曉  
 鳥帽も形もあけたりや時 子 將  
 雁俤やてくくくくくくく 南 井  
 むの後の日のあきくくくく 雪 溪  
 鳥より先くくくくくくく 楓 二  
 標ももまはくくく 一 日 柳 外 青 藍

経手廻の空をうつつきのぬきぬき竹 信言 自耕  
 花をねむい 信礼 梅意  
 風流のそと種もや柳 信業 由水  
 社家町はさね子守のく月入 言 子寅  
 大高の海は西へ木下 信 一湖  
 踏はく積まわくくや葛藤半 信 秋亭  
 尾長きおのう屋よりも 信 所風  
 下社家のさるふけつ 信 白齊  
 旅人の塚ありとあらぬ木槿 信 即我  
 人の散花く 信 渭南  
 描の意外は白雲を遠く 信 湖曉

西本花 三春 南鶴  
 出かたりや 信 梅意  
 十六社の 信 南井  
 以備左の 信 扇風  
 去年の男 信 扇風  
 標とあや 信 扇風  
 あ 信 扇風  
 初め 信 扇風  
 岸隈 信 抱儀  
 麦搗の人 信 魯石  
 髪法 信 抱壘

日のくれぬをみかきりを梅白ふ  
雪の口先より甲を張りくらし  
手枕のまゝに現う唱田子  
夕傳しきわ梅をまきせる梅の夢

可負  
渭貞  
松杜  
兔川

四吟一頌

福山

李翁

あむむ神々りきよ

江戸

神々神々梅の朝日

一所

木我のけ子と文師の乾のまき

折く

表のはあ戸乃流風々々

一夢

海愚

|                |     |     |
|----------------|-----|-----|
| 浮しき應もつらみ秋のく小   | 大百  | 希孫  |
| 郭ふもつあぬ秋も常つら    | 田中  | 東湖  |
| 秋十日そと等字よ葉の香    | 武橋氏 | 崎路  |
| そふ玉の露おうとてしちり   | 合人兄 | 幸馬  |
| あけちのめ梅とをくあけちの上 | イセ  | 椿堂  |
| 日よよりて経る日あり妻は雨  | アキ  | 翁老  |
| 春くや梅ふ小ぬけ大酒言り   |     | 茶里子 |
| 世中よよりれぬ人そ標志看   |     | 青阿  |
| 休しあき松の風やほほ二存も  |     | 公石  |
| 井川野山野たつらまの色    |     | 蛙水  |
| 浮の月おのちあとも      | 柴   | 菰禾  |

山崎子流る水はかえりて  
等閑よるの鳥く亭柳小  
たのつら雨はさきよ松の夢  
又ぬこまのぬか戸閑古き  
うかのややをくうて海は  
杉風の早を地をちく千鳥小  
晴れやまのけ巻くと花さつめ  
福まのやまのく又ゆけし  
まの月すらるぬ風のそとく  
そ探のやまぬもや森の心  
元山や松風白く吹ふ山

兔自  
株志  
鳥若  
子曉  
御風  
可貞  
一磨  
踏竹  
抱侯  
魯石  
葉貞子

海り流るや朝日よきえもせり  
川流る梅のちり也月表小  
志中りちるき風のそとくやまの山  
鳩ふくやつりよる水の音  
菊の夢れ其葉子流る小松  
花をけつ申ももさり川へつり  
らちくく杉葉の上は花葉小  
その外うらつちけえ花のちのぬ  
花のさやや登るよ向く花一カ  
花くくちや植木乃二三本  
庭の木のまきまらうて余る音

元風  
炭松  
元民  
文州  
樽景  
梅董  
梅前  
文調  
石染  
可貞  
朗亭

星をくわねくちり月の色は  
おこる子宿も花をむの山 松尾 子寅  
九子

花控山

くわくくま 晴のひひ秋の月 修 天来  
あつそりと月をまけて庵の夢 松尾 首我  
新かやをわきのこや雲の影 京 茂良  
まろくくを膝もたきる月の方 抱壘  
まきの馬よゆれ 中や田面の白  
草特り山色くよかたりり お母 蒼帆  
萩の気後えまよまおれり 黄 清子  
苔の唇耳なり 山は隣り 黄 抱儀

白魚の目お鳥お玉をさし 昔 香取  
二人よりのいよあまおの申 北 采  
沖波噴まきくのすく 川 渭南  
山心りくくくくく 後 磨 御風  
松茸やるは附力ふ折あ え 雄子  
部くくくくく あ 萩 之芝  
雨もまき降くくく や 梅 椿年  
身一つの秋と春を 石 うふ 宗有  
栲くあ 牛 も嵐とつ り 山 逸山  
根を 夏 らお つ き 山 松尾 三 素律  
は雨の雪よ ち ら の つ み え さ の 四 如猿

卯花の垣よきあしむ新の夏 大坂 巢石  
 後涼るけは月一隅田の笑 新 兔月  
 道一き松のちのしやをの月 下伏倉 北人  
 栄焼く竹よ雪のや雪け音 舟尾 素舟  
 雪さや海り馬乃木象心 信王寺 化成  
 竹とのす燈りのさや時音 信 子寅  
 あし毒の能るけさや露夢 信 辨地  
 中のしよ是も春風あつ風のみ 信 東湖  
 惜ひしつらりさゆて音さ 京 梅價  
 清しき山やつらある杉柏 大坂 奇橋  
 蛇をまて死とやをの露日糸 江戸 民玉

虫鳴や春ハ橋くさるるしつて 上春 賢美  
 松雪の松寒く過る四月うね 全 玉笑  
 ちるるしつらり神くさるる花のしき 全 里鏡  
 長袖の風よき老しきさるる 全 柳曉  
 裸子のしつ油つてくまのさるる 全 士由  
 四月の草よき日未たけ 全 鳥春  
 城をとおくしつらり 全 渭南  
 甜きやあしむ 全 朗亭  
 山雀の何とあさるる 全 子将  
 必月のあしむ 全 幸馬  
 あし春くも枕う 全 平山



宿まよふ秋をたもて言白  
 深くく鶴影のや秋影も  
 千重末ぬのこをあはれぬ月  
 川音の揺る尾の下をさる  
 け者も鶴岸橋乃思ひ下  
 中木川の袪ちひさし鳴り  
 罪なきしと思へく清き月  
 梅のあはれを月うたふ  
 涙のまよふ帰るまき見し橋外  
 虫のまよふを野せまき思ひ  
 白馬の驕りたりし柳陰

吳老  
 一扇  
 寥々  
 霖霖  
 柳至  
 波柳  
 祗呼  
 柳雨  
 南呂  
 標山  
 雲羽

神垣やあめし小鏡もあまくれ  
 湯の浅もまきれきまや浅若梳  
 中あめりし瓶のまき待押  
 橋のしるしをるや花まよるかき  
 白川此冥柳をらむを慕い  
 附芝の上もあはれをさるり  
 さるよ会者もあまき田舎  
 袴中の下志すくはをさるる  
 かまへあまきまよひ鳴りし鶴の襟  
 穂穂の影を伸すやをさる  
 思居く月の影をまよひ移の毎


丸子  
 壺仙  
 秀中  
 兎丸  
 兎川  
 二角  
 南浦  
 子寅  
 貞子  
 抱壘

月院社の即興  
 雨り危敷うらたのちりり  
 深山鳥の小春鳥 ちりり  
 約し橋のあつむさかみ味のまを  
 をりりその神よかゝる雨をよ  
 鳴下れおき電よはをえたるされ  
 とはゆふまゝ虫の秋よまゝりり

政老画  




七本りりり  
 ぶく見

一  


月院社の即興

雨り危敷うらたのちりり  
 深山鳥の小春鳥 ちりり  
 約し橋のあつむさかみ味のまを  
 をりりその神よかゝる雨をよ  
 鳴下れおき電よはをえたるされ  
 とはゆふまゝ虫の秋よまゝりり

貞秀

何九  
 九秀九秀

下照

くらき秋のつれづれの田川が  
 杉と萩もまづれみたるわ

抱負子  
 抱傷

曇るや月もの上をなみくく 大坂 井眉  
 ゆさぶるを時多様も作もの本 サカイ 此角  
 庵の燦拂ふ瓦をを白翁、 花實  
 梅の月もくらの火の暗まきき、 藤雨  
 着かふる月を大きーの夕 大智 和雪  
 くちまのまも深色ぬめを衣 茅 井譜  
 一時ぬけてまのの相の強 大坂 自承  
 茶舟も舟てしるへー夜の月 多 千鶴  
 出崎しー東の的振えさ楓 雲 百古  
 葉まきまむ青いまきりや月 女 玉泉  
 虫屋を川もおくく老ま 婦 備后 秋多

眼を洗ふ夜を陰り夕影の雪 修善 素蘭  
 火のりハ碓礮の力を鳴 蛙 替三 有交  
 一のみる下は芽のまき 芒 替 菊二  
 重おれぬらや花売の焼ゆ 俵中 兔丸  
 俯てゆま中れ月を時 り 俵中 素蘭  
 ころぐひのそくくりも 女 早 兔川  
 去の秋も院を 一 や あ く 一 浮月  
 ちる若子の油へ口ろく 凡 の 暗 大 昼鳥  
 炉の中やまきも薪の 乃 く あ 抱儀  
 蛇の相の あ ら ひ く き 若 外 完哉  
 玉ま り り あ ま の 色 水 提 打 終 十 廿 号溪

草の花は薄くぬりり水の色は  
 玉降のるをそぬぬ松外  
 為重をそ見ゆけて吹や雲雀  
 河よそそ苦菊作りし細外  
 口ぬき笑ふうき田子  
 拾ふ神のあらうき年よ橋  
 七夕や橋まきもゆえゆ  
 三夕やゆめさあよちうを  
 大勢の歌やちをそ秋の  
 せし通つて仏臨中草の中  
 古ゆやそそ丸きそそ

子将  
 松杜  
 士先  
 柳雨  
 杞並  
 野揚  
 松卵  
 賣雪  
 天燈  
 湧砂  
 様年

雨光る木より月乃老ふり  
 落能く一腰つてや山あらし  
 一盞りさそそもそそ  
 一ツ地まけ急なぬりて秋の  
 まさお登日の春も有らむ海苔の味  
 祖翁の句をそそ  
 かみのあらししあくとけ  
 いさちぬと掃除して侍牡丹  
 むんえんの木ハチー春の山  
 豆を散や向い合つる漢又主婦  
 蓬葉よ浪石け橋もあそ

不二丸  
 徳李  
 不石  
 樗山  
 南呂  
 兎丸  
 雄佐丸  
 嶺松  
 因山  
 更牛

今階々音こゝろをえむ路 飛大坂  
自云乃鹿掃切くま川 鯉京  
萱屋根の谷乃小茅もむり台  
有船を松よ持り五月晴  
梅咲やまきの後人乃来し

中禪寺

牛石も水乞ふ福好異う形馬  
木津の四く返志うや叫いそ  
清水もきく襟子志みつの音り外  
空陽ちやなうれおきぬ蟻の  
笛の音は流りうちと中日書

星僧  
茂良  
子将  
朗亭  
淳月

牛山  
抱儀  
芦籠  
完哉  
應声

月佛一由勢亦乃松老くく禪  
札納の酒罽人志りよぬまなり大坂  
月表くくそんり芥多候かあ外昔  
ほ返る處のもあらうう處のきも、  
新役の鶴かくくくうるる中戸  
下りやるのあくくのみちくく貝  
三日月とくくくくおむ抽ハ子  
是くく日やんすもえ風の時、  
雲のあくくくあくくあくく馬  
天舟やまくくい中くくくもロ  
風くくくくくくあくくくく花

李の野  
奇則  
路友  
湖曉  
抱儀  
馬紅  
李峰  
桂丸  
平山  
波柿  
子将

武蔵野や雪の窟キウ 雪の窟  
 かたへくさき月日とちりぬ葉の花 田 因山  
 ぬくぬき佛のまゝぬ情ウ 弁 或え 吳老  
 龍おのえゆれ狐程を月ヒ 鬼丸  
 松のたまきみとてけ飛ハ 椋ハ 権依丸  
 層雲くくく降道ハ 守庵ハ 寄山子  
 懐子のね月ハ けり 葛の花 抱儀  
 横笛の音ハ つらハ ぬハ りハ 中ハ 宮 ハ 言ハ 溪  
 音ハ 雷ハ のハ 音ハ 踏ハ ぬハ くハ 啼ハ ぬハ 鶴 看之  
 橋ハ のハ のハ 音ハ ちハ ぬハ 鶴ハ のハ 音ハ ちハ ぬハ 鶴 應声  
 なる菊ハ 風ハ 招ハ きハ たりハ 片ハ 底 勢行

千代のるハ 雀ハ のハ まハ ごとハ 草ハ 葉ハ 外ハ 草 幽嘯  
 袖ハ のハ 何ハ やハ 申ハ けハ むハ のハ 音ハ 丹ハ 浮里  
 赤ハ 老ハ をハ まハ ちハ やハ 水ハ 鏡ハ のハ 音ハ ちハ ぬハ 鶴 尾ハ 月ハ 底  
 丸ハ ちハ ちハ ちハ 月ハ のハ 音ハ ちハ ぬハ 鶴 中ハ 夜ハ 雨  
 雪ハ 庵ハ もハ 世ハ ちハ ちハ ちハ 老ハ のハ 音ハ ちハ ぬハ 鶴 下ハ 水  
 雪ハ 園ハ のハ 音ハ ちハ ぬハ 鶴 形ハ 月ハ 敵  
 井ハ のハ 水ハ はハ けハ 連ハ けハ もハ 桐ハ のハ 音ハ ちハ ぬハ 鶴 一ハ 司  
 さハ らハ ぬハ ぬハ もハ 大ハ ちハ ちハ ちハ 山ハ のハ 音ハ ちハ ぬハ 鶴 卓ハ 池  
 正月ハ のハ 音ハ ちハ ぬハ 鶴 魚ハ 方ハ 甫  
 梅ハ とハ 心ハ のハ 音ハ ちハ ぬハ 鶴 公ハ 石

乃れもの志のうらもえし秋の風  
 草一葉もあはれなき秋の蝶  
 藤のむとそくくくくき少門外  
 新靴のききとをけまふやけり子  
 風一吹せし又さし席の息  
 枝よなるやうきを喰ふも藜外  
 庭きのの吐るまそり牡丹外  
 波くぬ目と音柳の体うぬ  
 五月晴や稲出ともたす代々  
 屏風一幅活て事足りぬ  
 ゆき老累よきまぬくくじを赤ま

言山  
 啓義  
 露石  
 盛之  
 如瓢  
 茂葉  
 赤嶂  
 野崎  
 旭菜  
 松堂

僕臭きものど着く終え秋の風  
 月えあられ琵琶の横先  
 いあしこの強よ戸垣むむむ  
 そよそらし水けしき  
 石ユウ二おの傍と大事りり  
 けつもまきぬ 猿の腹立  
 あぬくと甲次乃雲の横とけり  
 佛出のあき道 連  
 茂もあきとも茂睡もよび

元風  
 何丸  
 風丸  
 風丸  
 風丸  
 風丸

うしろく蝶の写み鳴らう  
生ぬるさ水新燈をききま  
鏡もそいぬる箱の扱口  
有的の暈は持おとまきられ  
おけ隣とえくるあしう木  
る形うのかしこころみそぬ  
あそこのちりさきもちりし  
歌のむ味るけ花もちりあ  
ありさぬまのちりさきも

丸全風 丸九風 丸九風 丸九風

腸起

海あり音は初初る森そのぬ  
杉はわさき入際の日  
初序は木綿合組はるきあて  
橋のぬららちい大浴層  
家根石は春のまきまし  
いしきままはまきる 焼山  
葉鞠は柳一枝ききまみ  
日和くちまき乃舞ふなり  
葉盤は馬は眠寝まきわて

故  
鳥峰  
一磨  
仰丸  
龜溪  
鹿聾  
看之  
仙芝  
魯石  
禁水



雪の飛うまはりまけりけり  
現れ見ふうゝあはれなきあひま  
うき事志しきまよふ烟 猿  
揃られ 雁氷乃月此かろ 藪  
くらゝをひげて隔るおくれ  
垣隣寺難此解を祈しし合  
業朽くくの又を信をきたり  
水際より流るる水先し花の枝  
幕の一まよふ申る 陽 光

清子  
完共  
負子  
芦雁  
勢竹  
考溪  
後橋  
抱儀  
黄袍

月も悦と一暇ふ竹枝けり  
踏も秋をうけりかろ 亭  
菱の葉の帯よるあはれ  
蕙橋つらと探よえり  
二重の重柵付し雲の楯  
あつゝ星の起かゝる又中  
水雪の癖をよみ出さる  
方車挽車は火工をよみ  
おひのいとまきくまのし 笑中

素雄  
何丸  
色山  
丸山  
丸山  
山丸  
山丸

雨の六田よ平香かゝる。 後  
 名よ言まき津の俊乃きもんは  
 横よちくくき 麓の林風  
 籠裂くきつはも神さ月の中  
 神さ良かそくちと子と比る家  
 かねもいよ下寺あひえ上人地  
 花よ志りくく行袴 なる  
 水き目のおくちも昔よあひり  
 隣のなるよ押かゝる 云々

山丸雄 山丸雄 山丸雄

名月や唐詩のね吟お園  
 あらつらぬれは虫の法を  
 粥さ守際も秋け文ぬこ  
 通しきと射て膝をかかめる  
 雀よ似てまきひらひらか  
 李のちりまきく 酔つ下  
 まさなまき扱な車とけりけり  
 土間よよめ蝶の舞ふり  
 仲西のそまきまきまきまき

双山  
 何丸 先士  
 山丸 先士  
 山丸 先士

下り糸の尻もあまうり  
糝もさきもあまうり  
月の細もあまうり  
山寺の破もあまうり  
糸あひりもあまうり  
籾をゆき宿の露もあまうり  
干かきもあまうり  
粉もあまうり  
院のかきもあまうり

山丸先 山丸先 山丸先

稲まのり青のり  
すゝのり  
付麻のり  
湯のり  
初雪のり  
玄研のり  
竹杖のり  
尾麻のり  
陽あまのり

玉丸 玉丸 玉丸 玉丸 玉丸

民玉

仲丸

新まらるる妻よきくたれ  
下り若狭の舟もきけり  
くくろ碇も帰るあけり  
廻廊の浪もあけり  
春衣の袖もくつる日のつら  
きあけり  
やまもあけり  
四神と月もあけり  
治のくくろもあけり

玉丸 玉丸 玉丸 玉丸 玉丸

不鳥をる花の枝も木槿垣  
風も袖もあけり  
末細き尻もあけり  
くくろ碇の汁もあけり  
蒲公英も茎もあけり  
膝もあけり  
白あけり  
片かなくもあけり

丁癸  
師丸  
癸丸 癸丸 癸丸 癸丸 癸丸

おろすは餅とまきう蟠の子う出あて  
雨よかつくしう麻の耐えを  
親の日の二日つけて牡丹切る  
車也今よお茶の市  
くのもひの腕のえなる天北川  
於産車しう月をまらり  
大津うう鶴合やを告ぐ事  
風ききひしうもお風呂の漏  
屋根ふきも家神も毒ふじの岩  
おろるうのかよ山寺おぼ後

癸丸 癸丸 癸丸 癸丸 癸丸 癸丸 癸丸

緑豆は二ひりや吹や露の風  
おろれりしう麻のわれ声  
上々窓の月よ急望とみらやそ  
ちよつけれそ暑く泡を  
浪竈の崩れを境は凄まじ  
今もものうけ右にた往り  
昔深しや其石盤をあひ北面  
めききしうもそ持のうら  
身の果と信夫の山北山かつら

兔川

仰丸

川丸 川丸 川丸 川丸 川丸

他のありてをふきく浮中  
光景もよほらば癖と封伸と  
いふよりあはれ玉方の友  
月をきくおまのそまほまりり  
新や為の指縁と又よ  
石工の火とあふる馬の面  
笠原くく青林ととも  
訓讀会よらの花の咲初と  
日のうけあきまの窓の寮

丸川丸川丸川丸川丸

蜂よなる虫とまきけとあふる  
おとさめきくぬ夢の浮橋  
釋粥の焦け付まそは焚くこれ  
湯治庵りの駕と昇巴む  
兄中よ二十日嵐はたむらむ  
海をくすむ天守とえおまき  
空の白き南祭よさか  
赤い庭よあは山崎の月  
初葺よ藤のあそおあえて

丸川丸川丸川丸川丸

思ひ返しを頼る神良 猫  
 葬礼子存ぬ禱とまら上  
 脚をりきき又する川音  
 毛刀は名多き甘かれ任  
 雀を踊り鳩はうなまら  
 凡の鳥は又新く改め  
 雲の積り舞む門札  
 白雲のゆよかふるさくら時  
 春の鳥を眠る みの 龜  
 川 丸 川 丸 川 丸 川 丸 川

雪晴く見れ斜の日脚は  
 家鴨乃声ハ交ぬ 戸 鴨  
 肝養ひて根燃るまき子菜  
 持ッる鳥は泊す塚のまき子け  
 品箱川の中へさやく月の友  
 探出さきつゝさきさきさき  
 秋風の神は羅し只 並子  
 春のさきさきさき 玉と 歌  
 翠羽  
 仰丸  
 丸羽丸羽丸羽丸羽丸羽丸

從是也其の丸と云ふは坊々事  
 今迄のゆるぬ服の減や  
 時を希有ふ所くけさる  
 江湖もれも足やめさるもの  
 松の葉刀の草と云ふは  
 くるあるくある上の五文字  
 葉合りあさるは片怖の名も立  
 藍の穢潔と云ふは有  
 中子のあ髪あろす花あふ  
 衣柳をすくはる禪衣けす

羽丸羽丸羽丸今丸羽

松風や清溝日赤乃空と云ふ  
 帝子乃夢の今意子らら  
 蒲太の蒲と云ふはあし  
 秋と云ふはきあけらる  
 謙の忍れは研直の日影  
 くのさ知とぬま  
 つねの琴は根杏何年  
 くのめと捨る実上の定  
 美馬のおくひあきほる

故五園

旭菜 何丸 子將 一和 千教 抱儀 兔丸 業



おりのの駕子や〜とあつと  
五月雨の晴し梅を梅ま〜  
つちかぬ舟の月よつとゆ〜  
酒うらま〜の隈を〜  
方の細く〜あは〜思  
切えの山〜の夢と〜  
眼の様あ〜ひ〜ら〜  
むまは〜大馬の倉の糸 ぬ  
雀とつれち〜た〜ま〜

九将 和 款 俊 免 某 何 将

守歳

作の木のまもゆめゆめ年まの  
糸のま〜と〜あ〜 昔  
ま〜戸のま〜く〜目〜ま〜あ〜  
漆ま〜の〜柀の 陽 光  
連 竟の下ゆく水は豆の月  
牛の怒のやむ〜く〜ち〜  
おふをり乃あや〜と〜装う娘を  
鞠の清乃遠く〜あ〜ゆる  
お〜と〜麻 昔とあ〜ひ〜ち〜

文柀

九柀 九柀 九柀 九柀 九柀





夏は渾沌未分の一むらけを  
四方より風をまきくくの智  
要くかちえ乃そちう終る信け  
一ツは止る色——

仲丸  
菊

良夜の賦

日月と天地の使わしきも月を  
大法水まわす精しくや故尔あま天  
地の本とくしき其言のあらはし銀河  
はくふ日月のまはるるもくしきも  
猿猴の月田無月日とくしき月を云  
くは月のあはるる暈あり口の傍り  
暈はれくふ雨ふるもそは自然  
ありくしき古人も日とまはるる  
やハ十月とまはるるハハ一  
百二十是  
その月とまはるるのあはるる

の皇と月とにたおして覺裳の衣  
の曲と響けし其の卿を罪なき  
しと死前の月とに福のさしと  
蛤蟹珠の盛衰を月とさしと  
らるも其の氣を感しその由を  
ししと月とツキルの時待朝日ハ  
ツキタツのころ待時日とツキコモル子  
待るしとツキの待候なり朝日未方  
よあると胸とつひ時日西方なり  
脚とつひ二日三日とつひ日とつひ  
しと四日とつひ十日とつひと夕日お

つひ十日とつひ下とありありとつひ  
も七日の月と朝日とつひと十三日  
と追喜の帝は朝候しつひとつひ  
寛平法皇の玉賞なりしとつひ  
侍有殿をよけ侍所侍中  
等ののちつひと上下のち法皇と  
らるふしとつひと唯月とつひと  
良妻のちつひとつひとつひとつひ  
海とつひとつひとつひとつひとつひ  
の真月の桂のちつひとつひとつひ  
とつひとつひとつひとつひとつひ

月院社主人海子  
霜兔と走らば

枯野の

夕ふら又夕乃そ 池み成まら  
ふ何某の危敷れらすまゝの路  
ふ同常の思を出せしは  
てしと如きまゝの豆の粉の  
被れし小童を俣 矢立を  
腰に物乃珍なるを  
それ人々す良の舟た  
空の心ゆくのみ送る 西書



そとにありては  
たゞの吹志に  
居たりては  
一尺の字に  
ありては  
素れ樹の情な

信るに色哉

と云ふも果ぬ  
すきよき  
中々本  
中々本  
中々本

名をく  
すて  
風月の  
後  
例乃





志願如海之深  
筆致如天之高

雅儀

也

讀信州何九翁所釋

俳諧七部大鏡

尊開巖戶照眞暗公羽琢鑑書

明誹諧古末科野靈光地

功業赫然萬世馨

虽于一字之思一筆之筆

百尺蒼桺笑題



極楽の近う来たるやう哉  
又ハの蛇目ハ傘や菫の花  
春南湖

○  
醉依童肩帰瓢然似御風  
鳴泉橋畔路初覚嶺西東

宋邦彦

あま月夜庵より来る乃

一軸ちりりよて影す

御風

吾碑も童子の肩に巾

ひとつゝ楊の春のちりわけ

花莖高根れ雪と彩りて

三津人  
何丸

魚乃あつゝのまゝ六月  
日一日踊俗衣を脱もせり  
鴻すみきりて悠るかきり

野揚  
玄蛙  
抱儀

○  
月夜庵よりあつゝ三津人をかきりて

八月十五日物故あ中 ちりりち部

大浸け序文を脱めつて福もふく

黄泉より脱めつて祇杖よりあくり

あつゝあつゝあつゝ今も他

あつゝ形見中とあつゝ  
十月二十日  
追著

月夜庵よりあつゝあつゝあつゝ

何丸

庭のうらひあつたのせをき拈て  
 風のみ清涼と申す時ぬりとも  
 日永くともつたては舞も舟の舟  
 暮あめあもあまの秋の草  
 漁火と余あまの移の面白  
 八朔の平又くはた松乃心  
 虫の音も沸き風や清閑  
 菊の香や牛け喘のいきり  
 祇灯の候はまやあつた外  
 檀持の花はけけけと啼  
 苔のぬるりも清くあつた

奇山子  
 箕風  
 可貞  
 路友  
 抱儀  
 一磨  
 仙芝  
 清子  
 魯石  
 抱壘

清押拈子の拈子強りりり  
 白のすも小春の暮又くは  
 曠をもえ付あつた  
 風をえくくくくく  
 炭汁くくくくく  
 雀の中はあつた  
 家の中はあつた  
 まよふれく又あつた  
 啼く鳥月よあつた  
 笑つたあつたあつた  
 ちる本のく風のも

春調  
 弁記  
 兔川  
 翠羽  
 賢美  
 抱儀  
 全  
 完哉  
 鳥十  
 天々  
 鳥文

初より中浦の宮家けりつゝまき  
 今更しく花あこころの 雨の  
 口切戸廿子花あけきけりまき  
 まるの宮者よの松風さし  
 面白く鳴よのさめいし  
 松風のそとてはゆきや  
 ろ花の戸もあめあつ  
 毎時中茶を全つころの  
 幼きの風あひらさる  
 一色のさよし  
 松風をけりまき  
 吉原  
 乙次  
 南呂  
 雨敬  
 美友  
 柳至  
 櫻桐  
 信片花  
 律櫓  
 兎丸  
 卜水  
 大狸  
 弁記

律院のとりよ動く芭蕉外  
 かときい切くふ風の吹き外  
 けり秋の白敷ともろ如番 椒  
 こけり入川を及もあつさる  
 ちるさあやし  
 松風とあなやせりし山田のあ  
 月入舟ちうけは漕かす  
 稲妻あを戸よえをきむ  
 虫のらうく中戸いなを吹けて  
 手短子日ハきまらう  
 隣まで秋はうらはく  
 今  
 得一  
 勇花  
 勇雪  
 雪丸  
 玉笑  
 公石  
 素麻  
 朗亭  
 信陣  
 七友



昔の根と露や和るの爪の海  
 月影を世の中り水写る子  
 乃彦くあけそむ子や膝角骨  
 乃彦のかりきあつり中つと  
 文月や水とるんきとあられ  
 ころりまうや時と山おきまを伴  
 白衣とつと家の枝預まうがほく  
 乃彦と収て糸とて又舟とつと  
 月霞れと朝も登と虫の夕  
 力の枝とせまうとまうと石  
 乃彦とあきとるやあ 石

上ケ太田 毛々  
秋三ツケ 杉亭  
彦内 蛙人  
常府中 梅権  
下サノテ 雨苗  
時、巢 和言  
下サ佐倉 北人  
常小田 壺仙  
小生 眠月

紫の山くうつとと鳴田螺  
 佐保姫も群れ玉へ朝梅  
 古た名のの流とと細一芦の角  
 常やそる芳のそとぬ産の偶  
 さびかさを忘れてまれハ梅梅好  
 春の麻の風ふひ念ふ日向が  
 子孫丹表も有へ一百子多  
 ちの人の後んくくう一春時  
 振袖よおて色むや菫の屯  
 萱夫つと伸り多と掩の日も  
 白梅を葎あや菴の辨尾し

上ケ太田 毛々  
秋三ツケ 杉亭  
彦内 蛙人  
常府中 梅権  
下サノテ 雨苗  
時、巢 和言  
下サ佐倉 北人  
常小田 壺仙  
小生 眠月

梅首の羽子足ゆれ跡生の水の晴  
 中入や嵐子似る家造り  
 花ちるをよあよ木を伐る男外  
 鶯のかくる声あも老とある  
 翅板の音ましくや梅の意  
 香をちるは梅や似代の梅香  
 糸花のまを度かやあぢあぢ  
 隣くくもてん酔や落の臺  
 ちる梅咲ちるくくく似る色  
 似梅をむけてもあもあも  
 近身のあ兒里らあ梅のむ

抱儀 全 一丸 三桃 弥月 椿舟 落美 旭菜 化成 一呈 楚雀

我上田 常雨各 サル工 鳥屋あ 武人兄 西光下 武五十子 秋田森俊

初まあがるや伊勢の法松  
 雨暗のまき花や朋もも屋付  
 あいあめまそ雛のみめくち  
 あいあやうまそ啼やまの風  
 春の羽皆日おすはと海す  
 之を散小鶯の音の涙かくる  
 葉のむれ小乃や痒た足の裏  
 飛啼よあまの音のむれ式  
 蝶抱くあまをを連よーて  
 馬よ林て屋をくりりる雉の声  
 白梅の浅黄よ来て雪よりり

丸山 士先 鳥明 磊石 梅主 子将 蛸蛸 杉亭 宇弘 砂丈 松月 子慎

西光下 武五十子 武がノロ 我ミツケ 土佐藤 時泉少年 フキヤ丁



齒のぬけりやまゝ家育桃の花  
スハト 旭菜  
 魚存むまきの 潮のふりて  
アキメニヤコ 白水  
いさは  
 嘗の朝日吞へ兒 風情うま  
秩父ニイタ 翠羽  
 赤祥寺の汐を見ゆりてあか  
秩父ニイタ 文調  
 朝心一日うをぬ 橋のう那  
 山乃や家まゝあれをさく椿  
小サ 抱儀  
十二ノ  
 兼解や前縁に成てよくか  
小サ 紫園  
 きてうそまゝと見ゆれ 友のむ  
仙大 仙芝  
 千町の門田を梅に透りて  
信福井 有水  
 んやーむまもむ 嘆辛夷の本  
仙大 北  
 梅のむ様うさうま小窓のま

飛てくまと 知りて 鬱鬱  
アキタ 梅月  
 糟桶を卓うく 窓よ 嵐うま  
、森原 楚雀  
 曆賣今年を古く 仕るは  
下サケ 雨苗  
キソ 因山  
 手心子四五丁 事入り 雪の傘  
千フ 嶺松  
大宮  
 床炭のあひるぬ方へ 剣子 危  
千フ 栖雲  
武セキ 五蓮  
 嘗子尺八ひく 元ハ  
彦月 可了  
 鼻の遠流しぬる みやまの水  
千フ 柳介  
ヨシタ  
 まよと見ゆり 節遠 町の丸  
房セウラ 印月  
武アケ 梅塵  
 是も子も 庭系か 谷一ツ

梅之の京を籠る武下住居元主  
 牛の尾の細流もあふ小橋椿舟  
 山を繞るよまあるまはれ抱後  
 水をふく井あるは杉の影女史先  
 梅咲ゆ猫ひびき出て足全れを  
 喜柳の移るも声女史一丸  
 菊枯くも部仲すスハ丁白水  
 春雨の硯のあはるハ丁元清  
 能因の折欠細牛込可寥  
 鶯や膝の減る南呂白扇  
 恙中の上よあふ理堂白扇

苔の老朽よ約きし消ぬ上并江  
 傾城の雲うて仕也秋田梅月  
 娃子の尾をきく可寮牛上  
 迷ひ子はあはれを時南雪内  
 焼旗立川浮月  
 物のみれ底や那抱後をかし  
 更科や月の外女史貞子  
 梅屋よ三人老芝桝至  
 山寺や月よ目白里水  
 柴橋の蜀下見え来りも旭美の家  
 七癖の上并性来一ノミヤん遠茶トる

並刈の汗のさみきりまみ彩クニヘ如瓢  
 夕方と小袖よなきや苔の花奥中寥々浦  
 曙の本魚空ゆる毛をゆせサリテ不玉  
 杜宇阿模のあまけ啼も奥杉田曲窓  
 大方とんぬ時さるやけい秋友海田文潤  
 戸はくろ涼一さつけ麻のあ元雄子  
 をる帆の突南らうく元雄子  
 友の夜を大きき丁子ガレエ椿祈  
 散芥子子蝶声あくも上ケ太田亘鳥  
 深古も啼や苔むす常比方千秋  
 以瘦の茅の志赤いや武古郡叟雀

きこくは晴也美生の中の文二本松弁記  
 暮や月ハ西施る眉越上田可保畠  
 捨てあまのよと吹守秋の風アキタ湖曉  
 蓮の香のまをかきり越尾倉杉亭  
 海音の眼口入や秋の雨小曲下南呂  
 名月や裏を喜う上井石倉抄之江  
 赤きもやろ並ひや星の光上ケ太田毛雲  
 錦炭をかけた風ある春の山老小田柳葉  
 暮の疾る枝の影や秋のま奥中鬼川  
 暮の蒼虫よらるるものも元砲儀  
 兼庵もまひいりして全

目の影よちるを懐かしく思ふ也 小女 鳥渡  
 肘骨てうーろよめぬ菴の月 完哉  
 灯籠の月よ光りて夜のもじ 龜窟  
 灯火も細り次ぎやいづろ 白巻 龜石  
 扇もも秋風ありて 子將  
 秋の丸め尼の住居を月を照す 子慎  
 秋の深水の泡も化さる化せ 秩父大工 炭松  
 漣さの月よとむ定はの山辺か 田子  
 送り虫と灰を集めて 鬼丸  
 掃き立て病ふさひ 武東谷 桃笑  
 日々風の外へ 信普光寺 柳水

落る日哉掃よせて 信名川 古泉  
 常の核燃おかせや 上ヶ太田 里鏡  
 盗人の忘れ 鉄やか スハ丁 白水  
 若葉よ折む キヲ田村 芳浦  
 行春の草踏 雀 抱俊  
 及替て 仙芝 仙芝  
 首の影と 眞アタチ 秋嵐  
 記し 仙大 痕列  
 露 全 緑毛  
 草の花 内巻 痕石  
 相生の山の 鷹も 下ナ巻系 濤鳩

唾小むせり年あらきや梅柳 下廿五尾 紫舟  
 梅々香を美立子けり常か 村松廣 可然  
 山乃や迷ひをくつむ莖 小女 紫園  
 隣々繞れりぬ花分り 鴻巣 旭菜  
 洞子を後子むけて教りたり ヤロスカシ 児洗  
 追道は足解活しし百系 サル工 陽氏  
 水子後を言とも唱く猿也 武アナシ 椿舟  
 見取の本隠れりり 梅屋  
 又まての串々梅り 抱儀  
 川柳の道吹けり 子将  
 七種を皆蓋し 朗亭

水春て版を定めり牡丹哉 替大正 以尤見  
 次平琴小管もそえ花外本 光小田 壺仙  
 衣子の杜ふらひて 上ウラ 泉里  
 山鳥の尾のゆかり 下廿八日市 錦哉  
 水子けり 紀梁  
 兼市の泥ふらひ 雨苗  
 水鶴啼あらし 小蓑  
 一日の六位座 其秋  
 秋迎く寺々 梅房  
 本も中も 可了  
 舟楫 旭菜



義経の夢を雪のおもす  
くろく水く先枯く柳外  
宵んも腹ハきりく越路ト  
紙布を織る嵐のまきやみ  
鹿の子代丘よのゆるや年の暮  
年の暮おもむけたる世々  
彩年や簑子は遠曳 山男  
大根のめけよりきりきり  
お嵐を茶の下に焼く落葉の  
降るおのちもきりきり  
焼きたの 詠みあはる落葉の

旭葉  
元風  
南呂  
子將  
抱候  
魯石  
一丸  
古泉  
抱候  
湖曉

信黒川

アキタ

七月雨や心えふ赤青悔りの  
中の戸と空もあつりまけ橋  
入梅も代りてかへさぬ 曆うま  
嘆き音の色も持りて 古口の  
下やみのおよあつれは五月か  
雨のむもあふんと眠くおろし  
恙行よまけて吹止む風け  
口まねをすれを止りて宋古  
早し女のおまよりあつれ東か  
碑の月日もくらりて古の花  
賽あおの妻れきりてよ宋古鳥

裁中  
二丘  
如仙  
信房  
抱像  
全磨  
一磨  
荒菊  
完哉  
俊雅  
金莖

信行ニホ

七カミ保山

行普光寺

庄内

下サ前原

月々々やと見ぬ枝の心 馬方 スハ 白水  
 堀くくよとやわりなき鳩 浅中 鬼川  
 二日月の序よんくく 栗の屯 千ノ大文 元氏  
 文て雨行たる 持もも衣たる フルメ 与山  
 老嘗て成むくるし 下屋備 旭菜  
 啼り水窮 夜るの心 持むる 田防行脚 舟我  
 雪 喜の勝よとみるや 不三指 佐余 北人  
 秋 遠く 来や 本ん中の 節き 花 豆大川 雪丸  
 本曾山もん 終よめぬ 更衣 エテ太田 玉笑  
 陰 中 日と忘れり 二月雨 浅中彩ホリ 峩松  
 餅と移る 持の 並ひ 夕 雨の 暮 柎紫

菱のまや 短くして とき鴨の足 ニトリ 三有  
 葉のちひさく たりぬ 秋の雨 仙大 蝶々  
 一 啼や えるり なる月と 中りて 佐余 ト英  
 昔うく 松のこころ 天の川 言泉更 菜花  
 虫もらうとも 秋もくく 立ぬ 松 浅中 兔川  
 振うよんくく ひら 目く ちる 五匹 朗亭  
 不ニススや 家よ 序の 外保よ 抱儀  
 麻 吹や 暮 盤 移たる 時の 度き 全  
 赤 衣や 絶 以 厚 啼 言き 稿 全  
 赤 衣や 下 手 の さゆり 結 ち 全  
 さき 衣の 終 括 足 ゆれ 九月 足 全  
 貞子



白菊や美葉は下も桂の  
 幸ささみの雨のぬきや萩の  
 萩は花も色あけ枯れ夕  
 きと晴乃すも花の夕の  
 香ささくあやむ世の  
 まはれよ物りり春戸乃つる  
 穂房の上よ花や昔は不  
 二日月よあけの夕や世  
 長手書くと引伸るる  
 谷の戸よ出入雲や海  
 京入のき林ゆう一  
 一磨  
 仙芝  
 全  
 雨苗  
 桂素  
 淳月  
 秋實  
 仙舟  
 文令  
 又調  
 松提

鬼灯のりえ強し思ふ夕日  
 穂房の乾きや切るる  
 作り人の心もえゆるか  
 萩は手と多しすうや萩の  
 夕々入るむ花の萩の葉  
 舞の音やとらら向ても山  
 虫の音は清しむたを  
 そとあつてもややうな  
 そまきやとあゆむ  
 桐えく萩の夕々さ  
 ちりり風の桐を  
 北人  
 得一  
 一呈  
 露石  
 盛之  
 梅香  
 朗亭  
 翠羽  
 橋元  
 不玉  
 浮月

隣りて林のうつくしき草花  
 言の年松より青くそよめく  
 家の音あうくくそよめく  
 余の聲も鳥の音もそよめく  
 中へえの天をよけいしゆん  
 羽のうきもまよふやうの跡  
 秋あうり待りや秋の雨と窓  
 元夜よきそよめく  
 柴燕と月とのるや野のそよめく  
 神屋やお指のそよめく  
 四方の風よ白くそよめく

七友  
 流憩  
 宇江  
 旭葉  
 山  
 千秋  
 抱儀  
 全  
 蔓節子  
 柳紫  
 鷹戸

鶯のよふくそよめく  
 偽の見えぬ空をり天の川  
 秋の蝶扇よのそよめく  
 秋のうす井戸のそよめく  
 草のうすいそよめく  
 妻をよめるそよめく  
 雲よ名のそよめく  
 卯月のゆけとほゆそよめく  
 芒のうすそよめく  
 唇のよめく  
 鶯のよめく

子寅  
 壺仲  
 かほる  
 全  
 杉亭  
 翠羽  
 柳木  
 憚悦  
 玉季  
 巴系  
 我松



山畑の一枚つゝあきのゆく  
白雲のつぬ紅さすや夕暮の雲  
横をさす夕の光り―雲氣が  
雲を牽引離れて早の空を  
く―らと―帯の巻のお空を  
躍とてさびたも秋の風  
ぬの麻とさすの影もより―  
暮空―あまのたの運のぬ  
あまの枕が志のたのぬ  
あまの摺ぐりの書月のやと―  
稚子の子も親つゝ―やけの

子將  
見未  
士先  
作人  
如松  
兔丸  
椿舟  
桂素  
同山  
一鷹  
杉亭

目体の日あるや月夜つゝあきの隈  
つゝそれと伸たつゝ未拵ぬ  
初霜や朝日のくさき窪の面  
舟の額のええて隈の月夜外  
露かきと橋根さり―暮の秋  
沈みの湯りか減や秋れと  
神を日秋の日暮はとめり  
そ不雨のさみ日ささへ―赤塔  
梧の葉も色めく秋れ夕アう  
つゝ叶のをれて菫のえよく  
夕夕子遊りれてりや伏れ鴨

越中  
天く  
賢義  
朗亭  
貞子女  
鶯溪  
完哉  
一磨  
仙芝  
雨苗  
陽成

かろつた月更てゆくかろつた雲の葉  
 昔早死ぬ日すまきの時り哉  
 露越日二日の月や花月記  
 ちる柳花もぬ拍りきりり  
 五のむし一團おききなりり  
 何出やききこらぬ言やぬの房  
 筆よ汲む流れ持りり月り高  
 川流れ流れさげさめめりり  
 歯のぬけと影とて泣ぬ秋の音  
 藤のや花月つめりり年り元  
 是る日の昔日照返花野り式

弁化 壺石 壺仙 如雲 仙舟 廻水 一翳 起直 旭葉

芭蕉云や松もこころの河風情  
 出灰筆け煙りこころの時雨りり  
 物ももよ葉の音けりり時りあふ  
 こころの端てこころの埋ぬぬ  
 こころの葉をけ神々ありけ花  
 目もえよ叶もやこころの啼りりり  
 松月の誠を啼りり泣きりり身  
 拵りりや名りりみゆりりま七所  
 こころの揺りり直りり眠りりりり  
 こころの月もきりり花の葉りりり  
 こころのたけりり目りりもりりり

鬼川 梅南 未及 奇石 賢美 應声 一書 陸奥 三有 鬼丸 松堤

吉原赤ッ  
目秀

里津系

清く種の花ももや帰る花  
 南呂  
 夢のいかに山よりよふ時雨は  
 東湖  
 冥き月のあを啼るるは千も  
 千林  
 さききくおのしめさぬくは津の  
 女貞子  
 さやの  
 服巻く花も年ちうらふの雪  
 桂舟  
 千在  
 か下川のほねをのりか春うら  
 歡水  
 縁のまけはゆきや名の花  
 子持  
 及びおのこころはるの雨  
 浮月  
 空のまけは移の白もなす  
 抱儀  
 玄指のまけくをけはゆき  
 全

名無きの白やすくき懐の雪  
 三川  
 兔月  
 又りふと入日えあくる花ゆきの  
 松の景  
 松月  
 月夜を月の再はけりうを牡丹  
 喜  
 観世  
 目赤をく踏割るきよあきの月  
 子持  
 子持  
 掃くは風の音あはるる花  
 名  
 柳雨  
 冥きのおを啼へうら千も  
 千秋  
 千秋  
 啼千もねよ度しく風の音  
 女琴路  
 女貞子  
 猿よりしあはるる記りうみさき  
 女貞子  
 女琴路  
 松風を月よきりし少おはる  
 女琴路  
 女貞子  
 丸めねくは佛こころのゆき  
 七千  
 煮仙  
 鬼らあはるる花の肉やうけけ  
 七千  
 香粉

年々くぬくくくなけり秋時多 カク 里春  
 水端より押かよさるや 拈尾花 カク 土先  
 不二の雪がまきみきくアキ カク 名美  
 少灰時多隣を何と挽音そ、 カク 名美  
 木啄の餅をかき地さくくく カク 雨苗  
 花香一まきの雪くくくく カク 素老  
 むのあもれ枝あまふくくく カク 古泉  
 雀のさうさうのゆきみ カク 巴水  
 人ゆくく雪のあま カク 土佐 カク 素老  
 氷踏へ稲妻あまふ カク 池の面 カク 素老 カク 竹人  
 半形よ本の肌又へて カク 月 カク 素老 カク 女月虎

新並よ溪帛さるや山竹秋 カク 旭菜  
 白雪と抱くくのあや カク 山 カク 鳳山  
 志不雨の垣根よ カク 志 カク 陸奥  
 持整く又ても男と男へ カク 仙 カク 文志  
 たまらくもあま カク 月 カク 篇竹  
 残の舎も竹 カク 子 カク 交志  
 けり枝や水又て カク 居 カク 表 カク 指月子  
 うし カク 掃 カク 筆 カク の カク 音 カク 杖 カク 如松  
 羽 カク の カク 音 カク 杖 カク 如松  
 必 カク 一人 カク の カク 来 カク 日 カク 好 カク 草 カク 乃 カク 取 カク 东湖  
 誦 カク ころ カク の カク 語 カク ころ カク 枯 カク の カク 風 カク 兔丸

野水亭雨乃志山 風の成 松戸 小叢  
 木城川をそそぐ 持てる能く 1名 蘇米  
 瑞服の家は言ふる 律 老ナ 如雲  
 吹向ふ糸色 庵より 杉表 椿香  
 海松ふさも 摘て月之乃を 梅鶯子  
 菊乃乃唐まて 持も 信之サカ 具海  
 瘦院乃乃及らぬ 七 祐う 上ケ太田 賢美  
 枝川より夕日と 曲る 一鷹  
 月の道千を 妻 因山  
 大子より 便 一鷹  
 与る事と 志 公石

雜口之後

詩歌連催の世より 行たるワ 秋  
 俳諧下へ おけるや 俗 秋  
 入やす 秋  
 情も 秋  
 な 秋  
 男 秋  
 對 秋  
 秋田 秋



子累の波濤をいともくはげしく  
應ずる人々既に舟子なり  
歌謡うりあはれ暗更の道をも  
らまゆりよきるめいさをも  
ならむといふもいふは誠解  
ありんかるといふ

卯月菴免丸

卯月菴

